日本グループ・ダイナミックス学会会報

ぐるだいニュース

1995年
5月10日

第５号

発行所／奈良市山陵町1500　奈良大学社会学部（矢守研究室）
日本グループ・ダイナミックス学会
発行人／杉万俊夫　　編集担当／大坊郁夫

**** 人の世に憂きの種多く、証さねばならぬことは尽きぬもの。 ****

阪神・淡路の震災にあわれた学会関係者も少なくありません。家屋の修復に腐心され、転居、仮住まいの方々もおられます。お見舞い申し上げます。また、典型的なパラダイムを応用し、快復しがたい影響を与えている集団、それにまつわる報道の波及効果の甚大さ。取り組むべき課題は尽きません。

最近の大きな出来事について、お二人の研究者からコメントをいただきました。（坊）

◆◆　災害における心理学の役割　◆◆

横浜国立大学　藤森立男

災害は、一瞬のうちに壊滅的な被害をもたらすことがある。阪神大震災もその代表的なものであり、死者五千五百人余りにのぼる多くの犠牲者を出した。テレビに映し出され、炎と黒煙につつまれる神戸市長田区の光景が今でもありありとよみがえる。一昨年、われわれはこれと同様の光景を北海道南西沖地震に襲われた奥尻島青苗地区において体験している。近年、大地震の発生に加えて、噴火・洪水・飛行機の墜落事故・テロ等が続発している。われわれは、災害と背中あわせに生きている。

従来、我が国の災害心理学に関する研究はパニック、避難行動、流言等に関するものが中心であった。しかし欧米の研究によれば、災害が被害者から家屋や財産等を奪い去るという物理的な損害をもたらすだけでなく、被災者に「心の傷」を残していくことが知られている。災害から約一年後に青苗地区で実施したわれわれの調査結果でも、「頭が痛い」「イライラする」「心配ごとがあってよく眠れない」「不安を感じ緊張する」といった症状を被災者の半数以上が訴えており、災害による影響が一過性ではなく、長期間に及ぶことを示している。今後、災害後の心の問題やその支援対策に関する息の長い総合研究が必要となるだろう。また、仮設住宅に暮らす老人からは、次のような話をうかがった。「災害後は、多くの研究者がやってきて、被害に関することをいろいろ聞いていく。しかしせっかく答えても、調査が終わればそれっきりだ。どんなふうに役立っているのか直接知らせてほしい。」このことから、研究者たちがフィールドからデータを採取することに心を奪われ、その成果をフィールドに投げ返す試みを怠ってきたのではないかという反省がみえてくる。同時に、この問題は個々の研究者だけでなく、学会組織としても取り組むべき重要な課題であると考える。

◆◆　「オウム真理教」疑惑と報道　◆◆

静岡県立大学　西田公昭

「オウム真理教」がさまざまな疑惑で空前の大捜査と大報道となっています。（といっても、これを執筆している現在の話ですが、）私は、不安と憂うつの中でその一連の報道を眺めています。また、これでやっと日本人も破壊的カルトの存在や彼らが用いるマインド・コントロールの手法について知り、少しは警戒するようになるかも....などと期待めいたことも思ったりもしています。

私が何よりも気になるのは、警察対教団の「戦争」が、マスコミや一般へと拡大し、教団メンバーは敵意を外集団全体へと膨らませてきていること。その原因はマスコミや一部の一般人が、実際に彼らに敵意を向けたことによって、まり、純朴で誠実に教義の実践をしているだけの末端信者までをもまるで犯罪者か狂信者のように扱おうとしている人が見受けられるようになって、彼らにとって幻想の敵であったものが、実際の敵になってきているということでしょうか。MertonやSnyderのいう予言の自己成就が生じているのではないでしょうか。スタンフォードのジンバルドー先生も、「これは２年前のワコ（テキサス）の事件と同じ方向に向かっている」と私に電子メールで同様の心配を訴えてきました。

私はこの問題の解決には、彼らのマインド・コントロールを解くことしかあり得ないのではないか

と思っています。センセーショナルな逮捕劇が終わると、きっとマスコミ報道の減少とともに世間のこの問題への関心は弱まるでしょう。でも、それではまったく何も事の本質において解決したことにはならないのではないかと思っています。なぜなら仮に教団がつぶされても、彼らのビリーフ・システムは変わりません。離教することの恐怖心、教祖を崇拝し隷属することの意義、外集団への敵意などは、特殊なカウンセリングによって解放させない限り、ずっと問題は残っていくものと思われます。

▼▼▼　事務局情報　▼▼▼

本年度から、学会事務局の体制が大きく変わりました。ご留意下さい。なお、奈良大学の事務局への電話連絡は、可能な限り、月曜日または木曜日の午前１０時～午後４時の間にお願いいたします。それ以外の時間は、留守番電話、ＦＡＸにてご用件を承ります。

①入退会、住所・所属等の変更、会費関係
〒５６５　大阪府豊中市新千里東町１－４－２
千里ライフサイエンスセンタービル１４階
TEL (06)873-2301　FAX (06)873-2300
学会センター関西（財）日本学会事務センター　大阪事務所
日本グループ・ダイナミックス学会係

②機関誌の審査・編集、大会案内、その他
〒６３１　奈良市山陵町１５００
奈良大学社会学部　矢守研究室内
TEL/FAX (0742)43-6374
日本グループ・ダイナミックス学会事務局

****

▼▼　常任理事会報告　▼▼

日　時　1995年3月26日　9:00～11:30
場　所　奈良大学社会学部２階資料室
出席者　(会長)杉万俊夫
(常任理事)大坊郁夫、黒川正流、鈴木康平、山口勧、山本真理子、矢守克也

【報告事項】

1．「実験社会心理学研究」編集・刊行状況

①34巻２号「特集号」
1995年２月刊行した。一部に印刷ミスがあり、ニュースレター、次号(35巻１号)に謝罪・訂正記事を掲載することで論文著者の了解を得た。

②34巻３号「英文号」
現在、鈴木常任理事を中心に、最終の校正作業を行っている。まもなく(本年度中に)刊行される見通し。

③新しい編集体制における主査の決定
新しい編集体制での審査が開始されている。具体的な手続きは、［資料１:審査フォーム一式］を参照のこと。主査の決定については、原則として、認知系論文については、山口、山本両常任理事が、集団系論文については杉万会長、矢守常任理事があたる。

④主査の「総合コメント」の副査へのフィードバック
主査の「総合コメント」に、副査の審査結果がどのように反映されたかを副査にフィードバックするために、主査に対して、「総合コメント」を副査に送付することを要請した。ただし、今後は、この作業は事務局が代行することとした。

⑤前編集体制下で審査した論文の受理決定
本件に該当する３編の論文について、従来常任理事会で行われていた受理決定を、例外的ケースとして杉万会長が代行した。

⑥現在の審査状況と35巻１号の掲載予定論文
審査状況は、下記の通り。なお、35巻１号については、和文誌には予算の許す範囲内で可能な限り多くの論文を掲載し、国内研究の醸成を図るという方針に沿って、現時点での受理論文13編すべての掲載を目指すことを確認した。
・和文誌…受理論文13編(原著10編、資料２編、文献紹介１編)、審査中６編(原著３編、資料２編、展望１編)
・英文誌…受理論文１編、審査中２編

2．学会事務センターへの委託経過

先の総会で確認された方針に沿って、会員管理業務、機関誌、ニュースレター発送業務などの引

継業務が順調に進行中である。なお、上記に加えて会計業務も事務センターに委託することにした(経費は変更なし)。

【審議事項】

1. 会則および会則細則の変更
会長より、会則および細則の一部変更が提案され、審議の結果、一部修正の後、［資料２:学会会則／同細則変更案］に示した変更を次回理事会、および、総会に提案することが了承された。
なお、現会則および細則は、会員名簿巻頭を参照。
2. 和文誌執筆・投稿規定の改正
原稿執筆の現状、新しい編集体制への対応を踏まえ、同時に、規定内容の簡素化をはかるべく、和文誌の執筆・投稿規定を改正することが提案され、審議の結果、［資料３:和文誌執筆・投稿規定(案)］を作成した。また、この規定の正式発効は、1995年度総会の承認を得てからとするが、理事の賛意が得られれば、先行してニュースレター等により会員に周知することとした。
3. 英文誌執筆・投稿規定
現在、英文による執筆・投稿規定が整備されていないため、急ぎ作成の上、34巻３号に掲載することとした［資料４:英文誌執筆・投稿規定］。ただし、これはあくまで暫定的なもので、細部については、今後理事の意見を取り入れながら、常任理事会で再検討することとした。また、印刷の体裁の一部を、ＡＰＡ刊行の雑誌をモデルとして改めることを確認した。
4. 次回の「特集」（35巻２号に掲載予定）の企画ニュースレター等でテーマを公募したところ、渥美公秀氏より「データとしての会話」というテーマで企画書が提出された。審議の結果、渥美氏の企画を採択することに決定した。
5. 英文誌の編集方針
先の理事会、総会で確認された方針(①英文の特集を組むこともありうる、②アジア、環太平洋の国際的研究者ネットワークとの連携を模索する)に沿って、以下の２つのプランを承認した。第１に、次号(35巻３号)において、Wagner教授(Linz University)の巻頭論文を中心として、social representations関係の特集を組むこと、第２に、英文誌の審査・編集・刊行に関して、Asian Association of Social Psychology との連携の可能性を検討すること。後者については、６月に同学会に参加する山口常任理事を中心として、今後さらに具体的な方針を検討することとにした。
6. 「学会賞（研究奨励賞）」の選考手続きの改正
先の理事会で提起された現規定［資料５:現規定、現内規］の問題点について検討した。その結果、内規の「②選考手続き」を以下のようについて、選考委員会委員長と協議し、了承が得られれば、次回の選考(1995年度)より適用することとした。
   イ）選考委員は、審査対象論文をすべて審査し、１位、２位、３位を決める。
   ロ）各委員より１位と評価された論文に３点、２位とされた論文に２点、３位とされた論文に１点を与える。
   ハ）委員会は、合計得点で上位３位までに入った論文を候補論文として、選考委員会の開催前に全委員に通知し、通読を依頼する。
   ニ）委員会を招集し、候補論文(１位～３位)について審議の上、受賞論文１編を決定する。委員全員の賛同が得られない場合には、単記投票によって受賞論文１編を選定する。
7. 「三隅賞」(仮称)の内容、選考
研究奨励賞が既に存在すること、研究の国際化の必要性を強調された三隅前会長の意向を反映させることを念頭に、以下の基本方針を確認した。今後、理事の意見を求めながら、次回常任理事会(1995年６月予定)において細部を決定し、次回総会に提案することとした。
   ①選考対象は、英文誌に掲載された論文とし、著者の年齢の制限はなしとする。
   ②授与は２年に１回とする(第１回は、1996年の大会において授与する。その際の対象論文は、34巻３号、35巻３号掲載論文とする)
   ③副賞として、基金(100万円)の利息分(２年分)を贈る。
   ④選考委員は、「研究奨励賞」委員と同一とする(任期２年)。
   ⑤名称については、検討を継続する。
8. 大会論文集残部の寄贈依頼
学会事務センターに、年次大会で発行される「大会論文集」(の残部)の販売を委託可能である。財政上のサポートにもなるので、来年度(1995年)より、大会主催校に、大会論文集残部の事務局への寄贈を依頼することとした。
9. 諸学会連絡会議への対応
最近の動向が山本常任理事より報告された。当面、山本常任理事を窓口として対応する。
10. 1996年度大会開催校
黒川常任理事に、広島大学総合科学部での開催の可能性を検討願うこととした。
11. 今後の常任理事会の開催方式について
各委員の居住地が分散しているため、face-to-faceの会合は年４回程度とする。それを補完するものとして、①主査の決定、②論文受理の正式決定、③新入会員の審査などの定常的業務につい

ては、月末ごと事務局より必要情報を電子メイル、ＦＡＸなどにより配信し、電話などによる「持ちまわり常任理事会」を経て、毎月１日に正式決定とすることとした。

12. 新入会員
下記の11名の入会を正式に承認した(受付順)。なお、この11名については、上記11の手続きを決定する以前の例外的措置として、会長の責任で入会を認めたことが承認された。
①林 理(東京工業大学・工学部・助手)
②水島 友昭(東京工業大学大学院・理工学研究科・博士課程)
③福田 靖(中村学園大学・教授)
④金 義哲(Chung-Ang University(Korea)・講師)
⑤大場 優子(九州大学大学院・教育学研究科・修士課程)
⑥木村 堅一(広島大学大学院・教育学研究科・博士前期課程)
⑦宮林 幸江(福島大学大学院・教育学研究科・修士課程)
⑧中村 完(琉球大学・法文学部・教授)
⑨唐澤 真弓(白百合女子大学・文学部・助手)
⑩柴内 康文(東京大学大学院・社会学研究科・修士課程)
⑪佐久間 勲(東京大学大学院・社会学研究科・修士課程)

13. ニュースレターの発行
①発行時期…５月連休明け(予定)
②形式…機関誌のいっそうの充実を図るべく、簡素化(横書き、ワープロ原稿のダイレクト印刷)を図り、経費を節約する。
③内容
・事務局情報(事務センター、奈良大の連絡先、業務分担など)
・常任理事会報告
・和文誌／英文誌の新執筆・投稿規定
・謝罪・訂正記事
・「実験社会心理学研究」審査方針(再掲)
・会員情報(新入／退会／住所等変更)
・本年度大会情報(他学会の情報、ニュースレター前号の訂正記事も含む)
・諸会合情報(Asian Assoc.、関西フォーラムなど)
・その他

14. 広告収入
機関誌、ニュースレターに掲載する広告について、出版社等と積極的に契約することを確認した。また、現在契約しているものについては、契約料を改定する方向で検討することとした。

15. 次回常任理事会の開催予定
６月10日(土)午後２時より、奈良大学社会学部において開催予定。

****

▼▼　和文誌執筆・投稿規定の改定について　▼▼

「実験社会心理学研究(和文誌)」編集委員会では、この度、下記のように執筆・投稿規定を一部改変するべく準備を進めております。正式決定は、本年度の総会でお諮りしてからになりますが、今後の投稿にあたっては、可能な限りこの新規定に準じていただければ幸いです。

和文誌執筆・投稿規定(案)

本誌は、グループ・ダイナミックス、社会心理学における理論的・実証的・方法論的研究、基礎・応用研究、定量的・定性的研究に貢献する未公刊の論文、資料、展望、書評などを掲載する。

1. 投稿の資格は、原則として、本学会会員に限る。ただし、編集委員会が必要と認めた場合には、この限りではない。
2. 投稿原稿の採否決定、および、修正は、編集委員会による審査を経て行われる。
3. 投稿原稿の構成は以下の通りとする。
①第１ページには、和文の論文タイトルと著者名、所属、英文の論文タイトルと著者名、所属、および、著者の連絡先、謝辞、（第１）著者の生年月日だけを記す。
②第２ページには、和文の論文タイトル、および、和文の要約、和文のキーワードだけを記す（著者名は入れない）。
③第３ページ以降に、原稿本文が続く。
④最終ページには、英文の論文タイトル、および、英文のアブストラクト、英文のキーワードだけを記す（著者名は入れない）。
4. 和文の要約は５００字程度、英文のアブストラクトは１００～１７５語、キーワードは、和文、英文とも３～５語とする。 ただし、書評には、和文要約、英文のアブストラクト、キーワードは必要ない。
5. 投稿の際は、原稿５部を、学会の事務局（〒６３１ 奈良市山陵町１５００　奈良大学社会学部矢

守研究室内　日本グループ・ダイナミックス学会事務局）宛送付すること。

6. 原稿はワープロ打ちを原則とする。用紙はＡ４（縦置き）を用い、１ページは、横４０字（全角文字で）×縦３０行とする。
7. 表は、本文と同じＡ４の用紙を用い、１枚の用紙に１つの表を書く。表には、Table 1、Table 2のように通し番号を付け、表の標題も同じ用紙に明記すること。
8. 図は、本文と同じＡ４の用紙を用い、１枚の用紙に１つの図を書く。図には、Figure 1、Figure 2のように通し番号を付け、図の標題も同じ用紙に明記すること。
9. 表と図の挿入箇所は、本文中に、３行を用いて以下のように示す。

－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－

表１を挿入

－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－

10. 本文中で、見出しなど、ゴチック体での印刷となる箇所には波線のアンダーライン(〰〰)を、また、統計記号などイタリック体での印刷となる箇所には実線のアンダーライン(＿＿)を引くこと。
11. 引用文献は、本文中では、三隅(1985)、(三隅, 1985)のように引用し、本文末尾(すなわち、上記３項④の最終ページの直前)に、下記の例に従って、著者のアルファベット順に引用文献リストをつける。このとき、和文、欧文を問わず、ゴチック体での印刷となる雑誌の巻数には波線のアンダーラインを、また、イタリック体での印刷となる欧文の雑誌名および書名には実線のアンダーラインを引くこと。なお、この点に関して、詳細は日本心理学会(編)「心理学研究執筆・投稿の手びき」(1991)の関連部分を参照のこと。

①和文の単行本の場合:(現行例の通り)　②和文の雑誌の場合:(現行例の通り)
③欧文の単行本の場合:(現行例の通り)　④欧文の雑誌の場合:(現行例の通り)

▼▼　英文誌執筆・投稿規定について　▼▼

「実験心理学研究(英文誌)」には、従来和文の投稿規定しかありませんでした。この度、それを英文による規定に改めましたので、今後の投稿は、この新規定に従ってお願いいたします。

(最近刊英文号の表紙裏のコピーをご利用下さい)

▼▼　謝罪と訂正　▼▼

「実験社会心理学研究」(３４巻２号)の表紙に、誤植がありました。お詫びして訂正いたします。機関誌の「表看板」であり、かつ、山中さんには初めてのご論文とうかがって、なおさら心苦しく思っております。以後、細心の注意をもって編集にあたりたいと思います。(編集委員会)

正　山中一英　←　誤　中山一英

▼▼　会長からの提案---ご意見をお聞かせ下さい---　▼▼

◎機関誌のタイトルについて◎

今後の検討課題の一つとして、機関誌のタイトル---「実験社会心理学研究」---についても検討していきたいと思います。

まず、「実験」という言葉について、掲載論文が、いわゆる実験室実験（ないしは、現場実験）に限定されるかのような誤解を受けるのではないかと危惧されます。もちろん、質問紙調査による研究はすでに数多く掲載されていますが、それ以外にも、各種のフィールドにおける参加観察的研究やアクション・リサーチ、あるいは、コンピューター・シミュレーション、記録文書・映像の内容分析、等も積極的に掲載していこうとすると、果たして現在のタイトルでよいのかどうかという疑問が生じてきます。また、実証的論文以外に、理論論文、方法論的論文を増やしていく上でも同様の問題が生じます。一案として、学会名である「グループ・ダイナミックス」を機関誌のタイトルに含めてもよいのではないでしょうか。例えば、「社会心理学とグループ・ダイナミックス」のように。

以上は、簡単ですが、私なりの問題提起です。事の性質上、拙速に結論を急ぐつもりは全くありません。広く会員の方々からご意見を仰ぎながら、もし、何らかの方向に収斂するようであれば、より具体的な提案としてお諮りしたいと思います。どうぞご意見をお聞かせ下さい。（杉万俊夫会長・記）

▼▼▼　本年度関連諸学会大会情報　▼▼▼

日本感情心理学会第３回大会　　５月１３，１４日（千里ライフサイエンスセンター、大阪大学主催）
日本認知科学会第１２回大会　　６月１５～１６日（東京工業大学）
日本ｺﾐｭﾆｹｰｼｮﾝ学会第２５回大会 ６月２４，２５日（札幌大学）
日本性格心理学会第４回大会　　７月２８，２９日（中京大学）
日本応用心理学会第６２回大会　９月　８，　９日（共立女子大学）
日本行動計量学会第２３回大会　９月１２～１４日（関西大学）
産業・組織心理学会第１１回大会９月１５，１６日（エル大阪、大阪大学主催）
日本社会心理学会第３６回大会　９月２３，２４日（成城大学）
日本教育心理学会第３７回大会　９月２８～３０日（茨城大学）
日本心理学会第５９回大会　　１０月１１～１３日（コンベンション・センター、琉球大学主催）

日本グループ・ダイナミックス学会第４３回大会　１１月２５，２６日（学習院大学）
　　連絡先　〒171　東京都豊島区目白１－５－１　学習院大学文学部心理学研究室
　　電話　03-3986-0221

==========

☆☆　学会・研究会等の情報掲示板　☆☆

◆第10回「関西フォーラム」報告◆

今回は奈良大学社会学部にて常任時事会が開催されるのを機に、常任理事の先生方を中核とした「日本人の社会的行動－特殊か普遍か？」と題する下記の如きシンポジウムを、３月２５日（土：午後３時～６時）奈良大学社会学部で開催した。

・**話題提供者**
　鈴木康平（熊本大学：『いじめ』を手がかりとして）
　山口　勧（東京大学：集団主義の諸問題）
　大坊郁夫（北星学園大学：非言語的コミ　ュニケーションをめぐって）
・**指定討論者**　山本真理子（筑波大学）、遠藤由美（立命館大学）
・**司会者**　　高田利武（奈良大学）

シンポジウムの概要を付記すれば、まず話題提供３氏からご自身の研究成果に立脚した報告がなされた。鈴木氏は、日本における「いじめ」概念の歴史的変遷と、英国での「いじめ」の定義と実態に触れつつ、社会的行動としての「いじめ」の普遍・特殊の問題を論じられた。山口氏は、一般に集団主義的とされる日本文化においても、個人レベルと集団レベルとでは配分行動が異なり、後者のレベルでは「個人主義的な」公平配分が好まれることをデータに基づき示された。大坊氏は、非言語的コミュニケーションの構造と基本的機能において、文化を越えた普遍性が認められることを指摘され、文化による行動現象の違いを「特殊」と見做すことへの疑義を示唆された。ついで、指定討論者２氏から「普遍と特殊」という概念の妥当性、日本人の社会的行動研究における分析のレベル等に関し、鋭い指摘がなされた後、熱心な討論が行われた。かくして、辺陬の地での開催や、当日の悪天の影響の故か、参加者は比較的少数に止まったが、シンポジウムは成功裡に終了した。（高田利武・記）

◆「日本顔学会」発足する◆

さる３月７日　早稲田大学国際会議場にて公開シンポジウム「顔」が行われたが、その際に上記学会が旗揚げした。哲学、コピュータ、機械工学、電子工学、文化人類学、心理学、化粧学、歯科矯正学、解剖学、犯罪学、芸能などの多彩な観点からの文字通りの学際的な学会となることが期待されるものです。公開シンポジウムの他に、研究会（ワークショップ）、出版活動に取り組んでおり、来年度からは学会大会も定例化していくことになっています。

　　学会会長　香原志勢（立教大学名誉教授、人類学）
　　副会長　池田　進（関西大学社会学部、心理学）・清水　悌（クランツ、メイクアップ）
連絡先：学会事務局　東京大学工学部電子情報工学科　原島博研究室　〒113東京都文京区本郷7-3-1
　　fax 03-5689-4637（または、ポーラ文化研究所　村澤博人　〒104東京都中央区銀座1-7-7
　　tel 03-3564-3651　fax 03-3562-6298）

◆電子情報通信学会第１回ヒューマンコミュニケーション基礎研究会◆

　　（情報処理学会グループウェア研究会との連続開催）
「ヒューマンコミュニケーションとグループウェア」　場所　北海道大学電子科学研究所
６月８日（木）
Jonathan Grudin(カリフォルニア大学、慶應大)　The history and future of CSCW and groupware:A personal view.
６月９日（金）

伊福部　達（北大）ヒューマンコミュニケーション科学への招待
　～心理学、生体工学、福祉工学、社会学を学ぶ人達へ～
米谷　淳（神戸大）グループウェアを支援するヒューマンウェア
濱　保久（北星学園大）説得的コミュニケーションの要因と機能　など
　連絡先：同会幹事　山田　寛（川村短大、03-3973-6291）

◆ Inaugural Conference of the Asian Association of Social Psychology ◆

期間　６月２１－２３日
場所　香港中文大學（The Chinese University of Hong Kong）
　連絡先：Yoshi Kashima, School of Psychology, LaTrobe University Bundoora, Australia
　　Ｅ－Ｍａｉｌ：psyyk@lure.latrobe.edu.au
　　開催地・宿舎等については、
　　Kwok Leung, 香港新界沙田　香港中文大學心理學系
　　Ｅ－Ｍａｉｌ：B02478@cucsc.bitnet, B045746@vax.csc.cuhk.hk, kwokleung@cuhk.hk
　　参加費：学生以外　ＵＳ＄５０　学生　ＵＳ＄２０
　　（開催校で用意してある宿舎は、約ＵＳ＄３０、singleはＵＳ＄６０）
　なお、この学会大会については、当学会として積極的に支援していくこととしています。国内での情報入手に関しては、山口勧常任理事（INET:b30215@tansei.cc.u-tokyo.ac.jp）まで。

◆「水をめぐる国際会議」◆

International Conference on Water Resources & Environment Research: Towards the 21st Centuryが、1996年10月29ー31日、京都で開催されます。11の発表部門の中には、自然科学・工学系の部門に加えて、Human and Social Systems、Risk Analysis and Management、Expert Systems/Decision Support Systems、Compliance to Environmental Regulationsなど、人文・社会科学系の発表部門も含まれています。発表、出席を希望される方は、杉万俊夫（京都大学総合人間学部）まで連絡を（Fax 075-753-6559; Nifty-Serve HHH02634）。

◆京大社会心理学コロキアム◆

今年度前期は、次のようなスケジュールで開催します。どうぞ、お気軽に参加を。
場所：京都大学総合人間学部A125室
連絡先：電話　075-753-6557（北山）・075-753-6564（杉万）　FAX　075-753-6559（北山・杉万）

５月１２日（金）３：００ー４：３０
河野敬雄（京都大学総合人間学部）　Stochastic Learning Theory -- マルコフ連鎖再考 --
５月２６日（金）３：００ー４：３０
鯨岡　峻（京都大学人間・環境学研究科）　心理学におけるintersubjectivity概念の射程
５月３０日（火）１２：００ー１３：００
Thomas Weisner（UCLA、文化人類学）　Culture and Human Development
６月１６日（金）３：００ー４：３０
Carl Becker（京都大学総合人間学部）　超自然現象の科学的考察
６月３０日（金）３：００ー４：３０
尾入正哲（京都大学文学部）　オフィス環境とプライバシー

●● 研究会紹介 ●●

通称“Ｓ研”　筑波大学心理学系　山本真理子

我々がＳ研と呼ぶ研究会がほぼ月に１度の頻度で、筑波大学の堀洋道先生を中心として開かれています。場所は、地下鉄茗荷谷駅近くの旧東京教育大学のキャンパス（現筑波大学学校教育部大塚キャンパス）です。Ｓ研のＳは多分社会心理学のＳと思いますが、その謂れはスタート時のメンバーが知っている程度で、最近参加した若い人々は何の詮索もなしに素朴にそのままＳ研と呼んでいます。

研究会は昭和４８年にスタートしました。堀洋道先生を中心に当時の東京教育大学で社会心理学に関わっていたメンバーが集まって発足させたとうかがっています。発足当時から大変解放的な研究会で、メンバーの紹介で、さらにその紹介者の紹介でという具合いに参加者が増え、今では筑波大関係者をはじめとして都立大、東大卒業者、慶応大学、東京学芸大、東工大、千葉大など、参加メンバーの背景は多岐にわたります。現在Ｓ研に登録しているメンバー数は約６０名で、がちがちの実験社会心理学者から臨床社会心理学や教育社会心理学者まで、その専門分野が比較的幅広いのも特徴です。

研究会には、斉藤耕二先生や菊地章夫先生をはじめとして発足当時からのメンバーがずっと元気な顔を見せていただいているのはうれしい限りです。そのような当初からのメンバーに加えて今春大学院生になったばかりの若い会員まで、老若男女合わせて毎回２０名程度が研究会に参加しています。若い世代に分布はやや偏っていますが、２０代から５０代までほぼまんべんなく出席者がいます。これらのメンバーには毎回必ず参加する熱心な人が多いですが、中には何年かぶりに顔を見せる方もい

ます。しかし、久しぶりに顔を見せたメンバーも毎回顔を見せるメンバーと全く同じようにとけ込めるやさしい、親しみやすい雰囲気があるのが、この研究会の良さだと思っていますし、このようないい意味でのいい加減さが２０年以上もこの研究会を継続させている原因だと思います。

研究会は、毎回話題提供者が各自の研究内容を中心とした報告と質疑応答という形式を原則として行われています。最近の３回の報告内容と話題提供者を紹介します。

「高校生が神秘現象を信じる理由」（聖心女子大学・松井豊氏）

「印象形成場面における連続行動の認知」（筑波大学・宮本聡介氏）

「羞恥の理論的検討」（江戸川大学・菅原健介氏）

研究会の発表内容は、広い意味での社会心理学でくくられていますが、消費者行動の話が出てくることもあれば、地域のコミュニケーションネットワークの話が出てくるなど、Ｓ研がカバーしている範囲は多様で、許容度が高いのも特徴です。

研究会の本来の主旨である研究発表の場では、話題提供者の報告に対して毎回鋭い指摘や率直な質問が活発に飛び交います。研究会では年功序列の身分も関係なく、その場に出席している者は皆対等の研究者として扱うことを旨としていますので、若い人の発言も活発で、うまくタイミングをとらえないと発言の機会を逸することもよくあります。

このように真面目で活発な研究会の後には必ず２次会、３次会が開かれます。３次会までつき合うと正規のＳ研メンバーと認められるのですが、この２次会、３次会こそが本来のＳ研だと認識しているメンバーも少なくありません。当日の発表者への慰めとアフターケアーがおこなわれるだけでなく、公私にわたる情報交換が密になされ、研究者ネットワークの拡充には欠かせない場になっているからです。事実、このＳ研のネットワークを母胎として、いくつかの研究プロジェクトが動き、多くの出版物が刊行されています。この他、毎年夏には、メンバーの親睦化をはかるための（真面目な研究会もプログラムにはいっていますが）スポーツ合宿も行われています。

このようにＳ研は、Ｍ機能もＰ機能もバランスよく備えた研究会であるといえます。前述の通り出入り自由の解放的な研究会ですから、興味のある方の参加を多いに期待しています。

★★　教官公募　★★

広島大学総合科学部では今年度，応用社会心理学担当の助教授または講師一名を公募しています。学部の（集合行動論）と大学院博士課程の指導担当を予定しています。応募資格は博士の学位取得者または取得見込み者で，３０歳以上４０歳未満の方です。公募締切日は７月１５日消印有効です。本学会会員所属の国内全大学と短期大学あてに公募書類を発送していますが，ご覧になれない方，詳細を知りたい方は当学部担当者・黒川正流（電話）0824-24-6579（Fax 0824-24-0759，または人事係（電話）0824-24-6308までお問い合わせください。

●○　記事をお寄せください　○●

各地の研究会、合評会の記録、案内など。　関連諸学会・研究会の開催情報など。

紀要、報告書などの情報。　自著の紹介、および他著の推薦など。

の情報、その他ニュースレター向けの情報をどしどし下記にお寄せください。次号（晩夏）以降逐次掲載していきます。

連絡先

〒００４　札幌市厚別区大谷地西２丁目３－１　北星学園大学文学部

大坊　郁夫（TEL　０１１－８９１－２７３１内線４６３）

FAX　０１１－８９４－３６９０）

Ｅ－Ｍａｉｌ：MAH02332@niftyserve.or.jp

==========

【編集後記】

＊ニュースレターの発行をと思いつつ過ぎた冬。春のあわただしさのうちに、その時期となってしまいました。随分とスタイルが変わったと思われたことでしょう。前４号の運営方針にありましたように、実社心研の機能強化（論文数増、掲載内容の多様化など）に関連し、このニュースレターの方は、今回のようにカタチを変え、ワープロ編集、ダイレクト印刷でとなりました。なにせ、小学校時代に新聞作りをしたかどうかも定かではない身ゆえ、レイアウトなど慣れないのですが、ご寛容ください。これでもかこれでもかと立て続けに大方の耳目を惹く出来事が続くこの頃。実践的課題を矢継ぎ早に突きつけられている感ひときわ。

＊これまでのニュースレター発行の名編集長黒川正流先生、そして坂田桐子さん、ありがとうございました。会員の皆様のご協力のほどをお願いいたします。

＊当ゼミの今井志保嬢にニュースレターの題字の作成を、佐藤靖子嬢に入力作業を手伝ってもらいました。（坊）

==========